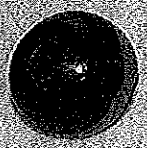
日本経済新聞
2010年(平成22年)12月25日(土曜日)

正倉院宝物と同系 ガラス玉

平等院でも発見



国宝・阿弥陀如来坐像の台座から見つかったガラス玉(24日、京都府宇治市の平等院)

平等院(京都府宇治市)は24日、本尊・阿弥陀如来坐像(国宝)の台座から見つかったガラス玉に、奈良市の正倉院宝物と同一系工房で作られた可能性があるものが含まれていたと発表した。

正倉院宝物は藤原不比等の娘、光明皇后が東大寺に献納した聖武天皇の愛用品など。京都市美術館の村井康彦館長(日本文化史)は「ガラス玉は光明皇后の実家の藤原家に伝わり(1053年に)藤原頼通が平等院鳳凰堂を創建した際に納められたのではないか」とみている。

平等院によると、台座から見つかったガラス玉約190個を蛍光エックス線などで分析したところ、約20個は鉛の含有量などが奈良時代のものと一致。様式を調べたところ、花びらのように表面がねじれた緑色の「ねじり玉」2個と、深緑色に白い線が入った「トンボ玉」1個が宝物に類似していた。

仏像や堂内の装飾に使われていたとみられ、同じ種類のガラス玉は奈良市の興福寺や元興寺でも見つかっているという。

東海大の井上暁子講師(ガラス工芸史)は奈良時代のガラス玉について、「中央に官制の工房があり、寺院を建立する際に出張所のような工房を設け、製作していたのではないか」としている。